

---

# **悪魔のおせっかい {修}**

北町 スイティ

---

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔のおせつかい [修]

### 【ZPDF】

Z8232R

### 【作者名】

北町 スイティ

### 【あらすじ】

あさのけんいち  
浅野健一は、今年から魔法学園セイスに通う15歳。「」く一般的  
に見える彼だが、そんな彼には、とても重大な秘密が・・・・。  
目立つことが嫌いな健一がドンドン目立っていく、ちょっとシリア  
スなコメディーです!!。

## プロローグ（前書き）

「めんなさい。20日を過ぎてしましました。  
お詫びに今日は2話連続投稿します。短めですが、これから努力していきのでよろしくお願いします。

## プロローグ

～？？？～

p p p p p p

機械的な電子音が鳴り響く室内。俺の耳は、さつきから鳴り響いている目覚まし時計のアラームで奥のほうがジンジンしている。俺はこの音が好きじゃない。別に特別理由があるわけではないが、なんと言つたか、心地よい夢の時間の終わりを告げるあの音が好きな人はいないと思う。おまけに今日はお袋が俺の入学祝いに送り込んできた特注の大音量の目覚まし。俺が入学式に遅れないようにお袋が用意してくれたのはわかるが、いかんせん、俺は朝にすこぶる弱い

『すまないお袋、俺は朝に敗れました』

心中でお袋に謝り、心地よいまどろみの中に沈んでいく

p a p a p a p a ...

鳴り響いていたアラームも止み、心置きなく眠りつつ思つていたときにはそれは起こつた。

力、力力力、カク

おかしな音がしているとは思つていたんだ

でも

あんなことが

起こるなんて

『起きろ……健……』

「今起きます……」

突然親父の声が鳴り響き、俺はあわてて飛び起き綺麗な敬礼を決めた。親父の朝の成敗の怖さは俺が一番よく知っている、というか身をもつて体感していた。

しかし、そこにいると思っていた人はいなかった。代わりにあったのは田舎まし時計。

お袋か

！？

## プロローグ2

俺の名は 浅野 健一赤い髪にメガネくらいしか特徴のないぴちぴちの15歳だ。そんな俺は今日から魔法学園セイス通うわけだが、なにぶん俺は寝起きが悪い、おまけに学園に入るのが決まってすぐに一人暮らし、俺が起きられるわけがない。そんな俺のためにお袋は用覚まし時計を入学祝いにくれたわけだ。

しかしあ…

これはないとと思う。

確かに朝に弱くて起きられないのは俺のせいだ。しかし、だからってこんなデカイ親父の声を入れることはないのに…こまつたお袋だ。でも、許せてしまつ。だって俺はあの一人に返しきれないほどの恩を受けたから。

入学式まではまだ時間がある、俺はゆっくりと制服に着替えながら、昔の思い出に思いをはせた。

（9年前）

降り注ぐ雨が冷たい、もう何時間も地面の上で倒れこんでいる。もう指一本動かすことはできなかつた。処刑されかけたんだ。血まみれで、汚くて。でも、目的は果たした。

このまま俺は死ぬ。

それでもいいと思った。彼女を救えた。ただそれだけの事実で俺はもう満足していた。それにもともと死ぬつもりだつたんだ。こうやつて生きていることのほうが俺は不思議だつた。

でも…ただひとつだけ、彼女に嘘をついたことだけは後悔していた。最後に俺に彼女が向けたあの顔が忘れられなかつた。たとえ彼女が何も知らなかつたとしても、そのほうが幸せなのだ。彼女が好きな

のは『俺』じゃない。俺じゃないんだから。

意識が朦朧としてきた。『こんな何もなとひりに誰かが来るはずはない。後はタイムミシットを待つだけのはずだった。

「あらあら、こんなとひりでおぬ寝？」

綺麗な声が聞こえた。まるで鈴のような声だった。

俺のこんな姿を見て、のん気に声をかけてきたのは、若い女だった。その後ろには同じく若い男。

「どうした、サナ」

どうやらこの女はサナといひらしい。サナは俺の事をじっと見ている。そして聞いてきた。

「何してるの？」

「寒くない？」

「家族は？」

サナは多くの質問をしたが、俺はどれにも答えなかつた。唯一つの質問を除いて。

「帰る場所は？」

「………… も、 い… ない……」

どうして答えたのかは解らない。もしかしたら本当は悲しかったのかも、でも、俺にそんなことはわからない。彼女以外に感情を持つたことがないから。

答えた声は本当に小さくて、函の音にかき消されたかもしれない。でも、サナは、『お袋』は聞き取ってくれた。やさしく微笑んで。

「じゃ、 ついの子になつましょつ

そう言つてくれた。

## プロローグ2（後書き）

「これから一歩も二歩も頑張りますよー。」  
前よりも丁寧に頑張つてみたんだけど、どうでしょつか？感想楽し  
みにしています。

河野(かわの) 鹿渕(なみぶ) (前輪村)

前とは少し違います。

（健一）

それから9年、俺は一人の暖かさに支えられて生きてきた。はじめのうちは何かに付けてかまつてくるお袋を、煙たがつたが。1年2年過ごすうちにそんなお袋のおせつかにも気にならなくなつた。

親父の頑固には本当に困つた。おかしな話だが、この俺がまるで子供の喧嘩のように親父とぶつかり合つたのだ。おかげで少し人間くさくなつたのではないかと思つてゐる。心も体も…。

しかしそうこいつときに『やはり自分は違うんだ』と思ひ知るのだ。

俺は、優しい気持ちがわからない。嬉しい気持ちがわからない。悲しい気持ちがわからない。『人間』と『俺たち』との決定的違い。心がわからない。

知識としてはある。どんなときを感じるか。どうしてそう感じるか。何でそう感じるか。

しかし、それでも足りない。どんなに知恵を絞つても、それを『口』で感じることができない。わかるのは、激しい破壊への欲求、殺人衝動、それに対する狂おしいほど満足感、いや、快感といったところか。

暗い話になってしまったが、とりあえず俺はお袋と親父に感謝している。本当は一人に恩返しをしたかったが、親父が

「おまえには、魔法の才能があるー。」

といつて、希望校の欄に『魔法学園セイス』と書いてしまった。それも提出の直前に。そのまま俺は才能を認められて学園に入学することになったわけだ。

俺はこれからどうなってしまうのだろうか…と玄関を開きながら思う。

鍵もかけたし、電気も消した。この馬鹿でかい家の中で使うのはリビングと寝室ぐらいだから平気なはず。

言い忘れたが、俺の両親はかなりデカイ財閥だ。表には出ないから、金持ちの中でしか名前は聞かないと思う。裏社会のリーダーとでも言つておこう。

おかげでメイドを付けさせられたくなつたのはまた別の話だ。

「ケン」

突然だが、俺の悩みは死かない、家のことも死なないが、この学園に

行くにあたつての一一番の問題がある。俺の幼馴染、河野かわの 鳴海なるみをどうするかだ。

「ねえ、聞いてる?」

あいつは、男ならず女までもが思わず振り返る美少女だ、鳴海が居る限り俺に平穏な生活は来ない。そもそもなぜあいつは俺に付きまとつんだ。ちゃんと自分の姿が人目を引くと自覚しているというのに……。

あれか、あいつは俺をいじめたいんだな。

そうに違いない。あいつとは俺が学校に通い始めてから七年間の付き合いになる。

「…ケン、いい度胸ね」

その間の思い出で、俺は鳴海にやせしくされた思い出がない。事あることに殴られる、蹴られる、拳句の果てに魔法をぶつ放される。俺が今まで生きていられたのは奇跡なんじゃないかと数少ない友人は言つ。

「私を無視しようなんて……」

そんなこともあって、俺に鳴海が付きまとつのは、俺をいじめたいからという結論に至つた。

今更だが、さつきからまわりの同じ学園生徒らしき奴らが俺のほうを見ては、血相を変えて早足で進んでいく。一体どうしたんだろうか。中には若干可哀想な者を見る目で見てくる生徒も居る。

この時点で俺は気づいて置くべきだったのかもしれない。

俺の後ろに……

鳴海オニが居たことに

「百年早いのよ……」

「ぐウフア！」

気付いたら

俺は空を飛んでいた。いや、吹き飛ばされていたと言ったほうがいいだろうか。あごも痛かった。何の魔法も感じなかつたことから、これは人間の身体能力から引き出された力というのが解る。こんな化物じみたことができる奴を俺は一人しか知らない。

「私を無視するからこんな目にあつの。少しは頭を冷やしなさい」

俺が最後に見たのは、仁王立ちで俺を見ている、鳴海の姿だった。それを確認すると俺の意識は静かに沈んでいった。

余談だが、このとき鳴海の最後の言葉に対して

頭を冷やすどころか、むしろ打たれたあごが熱いと思つた俺だった。

河野（かわの） 鳴海（なるみ）（後嵯峨）

感想待つてます。ちなみに駄目だし、誤字脱字の指摘も待つています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8232r/>

---

悪魔のおせっかい {修}

2011年7月8日23時49分発行